ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.13 No.7 July 2012

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

7

CONTENTS

- 巻頭言
  「福島大丈夫」宣言　風評被害の撲滅を…
  ／深谷忠一 1
- 天理教海外伝道の資料（29）
  満州伝道関連史料⑬
  ／深川治道 2
- 天理教伝道史の諸相（7）
  京都から滋賀へ、そして全国へ
  ／早田一郎 3
- 「おふでさき」の有機的展開（3）
  「おふでさき」第一号：第一首～第三首
  ／深谷耕治 4
- 「いのち」をつなぐ―生死の現象（7）
  死をどうしたら受けとめられるのか⑤
  ／堀内みどり 5
- 福島第1原発の放射能漏れ事故がもたらした想定外？の波紋（4）
  野菜や穀物においての放射能汚染と除染問題
  ／佐藤孝則 6
- ノーマライゼーションへの道程（5）
  障害者の自立生活
  ／八木三郎 8
- 平成24年度公開教学講座「信仰を生きる」：『逸話篇』に学ぶ（1）
  第2講：25「七十五日の断食」
  ／堀内みどり 9
- 図書紹介（68）
  『近世日本における儒礼受容の研究』
  ／金子昭 10
- English Summary 11
- おやさと研究所ニュース 12
  慈済大学「宗教実践と生命ケア」シンポジウムに参加・発表／デンマーク出張報告／平成24年度公開教学講座のお知らせ

巻頭言

「福島大丈夫」宣言　風評被害の撲滅を…

おやさと研究所長　深谷忠一　*Chuichi Fukaya*

世界保健機関（WHO）が、去る5月23日に、東京電力福島第一原発事故による国内外の被曝線量の推計値を公表しました。放射線を直接浴びる外部被曝と、吸入や食事で体内に入った放射線からの内部被曝を合わせて全身線量を計算したものですが、福島県浪江町と飯館村で10～50ミリシーベルト、福島県の他の地域では1～10ミリシーベルト、宮城、栃木、群馬、茨城、千葉の近隣5県が0.1～10ミリシーベルト、国内のそれ以外の地域は0.1～1ミリシーベルト、韓国など各国では0.1ミリシーベルト未満であったと報告されました。

日本政府は、「WHOが発表した数値は、食品の摂取制限などの防護的措置を何も講じなかったという前提での推計値で、現実の被ばく線量よりは過大なものになっている」と主張し、WHO自身も「被曝線量の過少評価を防ぐために、数値が過大になっている可能性もある」と認めているのですが、それでも、何れの数値もが、被曝による健康被害の目安とされる100ミリシーベルトをはるかに下回るものだったのです。（100ミリシーベルトは、原子爆弾のような放射線を一気に被曝した場合に発ガンの危険性が0.5％上昇するとされる数値です。しかし、日本人100人の中50人は自然のままでもガンになるので、100ミリシーベルトの被曝をしても、発ガンの可能性が1人増えて51人になるということです。福島の事故のような低線量の慢性放射線に対しては、どんなに慎重になったとしても、遺伝子異常、ガンともに心配する必要はないともいわれています。）

しかるに、このせっかくの福島の安心の種、復興への大いなる励ましになるＷＨＯの推計値の公表を、新聞各紙は二面の隅に申しわけ程度に報道しただけで、その後も相変わらず、0でないから危いという“危険でない危険情報”を流し続けています。

（「どんなに低い線量であっても放射線を浴びれば危険である」という、“直線しきい値なし仮説”への固執により、自然放射線の5％に満たない放射線廃棄物の処理等で、世界で年間160兆円のコストがかっているといわれる。）

ましてや、「低レベル放射線を当てれば、免疫が強くなり、ガンにかかりにくくなり、生殖力が強くなり、幼少より与えると背が伸びる等、生態の活性化を生じ、有益な効果をもたらすという報告も過去にはある」（米国保健物理学会雑誌1982:12トーマス・ラッキー）などとは絶対に報じようとはしないのです。

「放射線何ミリシーベルトが測定された」という報道も、最初は人々へ危険を知らす必要からのものでしたが、その後のマスコミの「危険煽り報道」による風評被害が、福島の人々を苦しめ、復興への活力を奪っています。福島産の農作物・海産物への忌避、瓦礫の受け入れ拒否などの表に現れた偏見だけでなく、子供がいじめにあったり、婚約が一方的に解消されたり、さらには、福島県人と結婚すれば、孫子の代に渡っての奇形児が産まれるリスクを負う、などという、とんでもない風評が地下で流される。現地の人たちも「怖いぞ、怖いぞ」と恐怖を煽られて、不眠、不安、パニック発作などの放射線心身症に悩まされる。避難の緊急性のない人たちまでが避難を余儀なくされ、大きな心理的被害や経済的損失を被っているのです。

38年前、原子力船「むつ」で起きた“微少な放射線漏れ”を、“放射能漏れ”とセンセーショナルに報じたマスコミのせいで、「むつ」は16年にわたって日本の港をさまようはめになり、その誤報の結果によって、大方の日本人は“原子力＝危険”と無条件に思わされるようになりました。（東日本大震災救援の“トモダチ作戦”で大活躍した米兵を運んだのは、原子力空母だったのですが、マスコミも誰も何も言わないのは何故でしょうか？）しかし、「50年はぺんぺん草も生えない」といわれた広島・長崎も、原爆投下の半年後には街は復興し、その後67年間、草木は絶えることなく育ち、海産物も豊富にとれているのです。

放射線問題で恐ろしいのは、微弱な放射性物質よりも、死の灰の恐怖を扇動する報道、そしてそれによる「風評被害」だということに、マスコミ以下全ての日本人が、もうそろそろ気づいてほしい。そして、みんなで「福島大丈夫」宣言をして、復興の後押しをしたいと思う次第です。